ソグディアナの都市を探る
―ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2024年度)―

村上　智見　東北芸術工科大学准教授
ベグマトフ・アリシェル　ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー研究員 / サマルカンド国立大学准教授
サンディボエフ・アリシェル　サマルカンド考古学研究所研究員
マハマディエフ・ガイラット　サマルカンド国立大学講師
ベルディムロドフ・アムリディン　サマルカンド考古学研究所上席研究員
レウトヴァ・マリナ　サマルカンド考古学研究所保存学研究室院長
アリモフ・ナヴルズ　サマルカンド考古学研究所博士後期課程
スブホノフ・フェルズ　サマルカンド考古学研究所研究員
寺村　裕史　国立民族学博物館准教授
宇野　隆夫　帝塚山大学客員教授
末森　　薫　国立民族学博物館准教授
押鐘　浩之　国立民族学博物館外来研究員

Exploring Urban Centres in Sogdiana: Excavations at Kurgon-Tepa in Uzbekistan (2024)

MURAKAMI, Tomomi　Associate Professor, Tohoku University of Art and Design
BEGMATOV, Alisher　Research Scholar, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences. Associate / Professor, Samarkand State University
SANDIBOEV, Alisher　Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute
MAHAMADIEV, Gayrat　Lecturer, Samarkand State University
BERDIMURODOV, Amridin　Senior Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute
REUTOVA Marina　Head of Conservation Department, Samarkand Archaeological Institute
ALIMOV Navruz　PhD candidate, Samarkand Archaeological Institute
SUBKHONOV Feruz　Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute
TERAMURA, Hirofumi　Associate Professor, National Museum of Ethnology
UNO, Takao　Visiting Professor, Tezukayama University
SUEMORI, Kaoru　Associate Professor, National Museum of Ethnology
OSHIKANE, Hiroyuki　Visiting Researcher, National Museum of Ethnology

1. はじめに

本プロジェクトではシルクロードを舞台に活躍したソグド人の歴史と文化を明らかにすることを目的に、ソグディアナの中心都市であったサマルカンド周辺地域において2022年度から発掘調査を実施している。調査対象地はサマルカンド州南東部に位置するクルゴン・テパ遺跡と、その約5キロ北方に位置するクルドル・テパ遺跡である。クルゴン・テパ遺跡は中世アラビア語史料に登場する「サンジャルファグン」寺院に比定されてきたが、近年では破壊が進んでおり、遺跡の保護と記録が急務であった。そのような事情もあって当該遺跡を調査地として選定し、両遺跡が中世アラビア語史料に登場する場所に該当するのか検証することとした。なお、もう一方のクルドル・テパ遺跡は、ソグドの中心的都市の一つと考えられるマイムルグ(米国)の有力な候補地の一つである。本稿では、今年度発掘を行ったクルゴン・テパ遺跡シタデルのトレンチ4における成果を中心に報告する。

2. 遺跡の概要とシタデルについて

現在のクルゴン・テパ遺跡(39° 26'57N 67° 08'59E)は、直径約50×50 mのシタデルとそれを取り囲むシャフリスタンの一部が比較的良く残存しており、さらに遺跡の西および西南部には、遺跡の範囲に含まれていた可能性のある4つの現代の墓地が確認されている(**図1**)。そのうち最も小さな墓地は「ザンジルバグ」と呼ばれている。「ザンジルバグ」はこれまで研究者らによって、中世アラビア語史料に登場する「サンジャルファグン」あるいは「サンジャルフィガニ」にあたるのではないかと考えられてきた。「サンジャルファグン」の「ファグン」がソグド語で「寺院」を

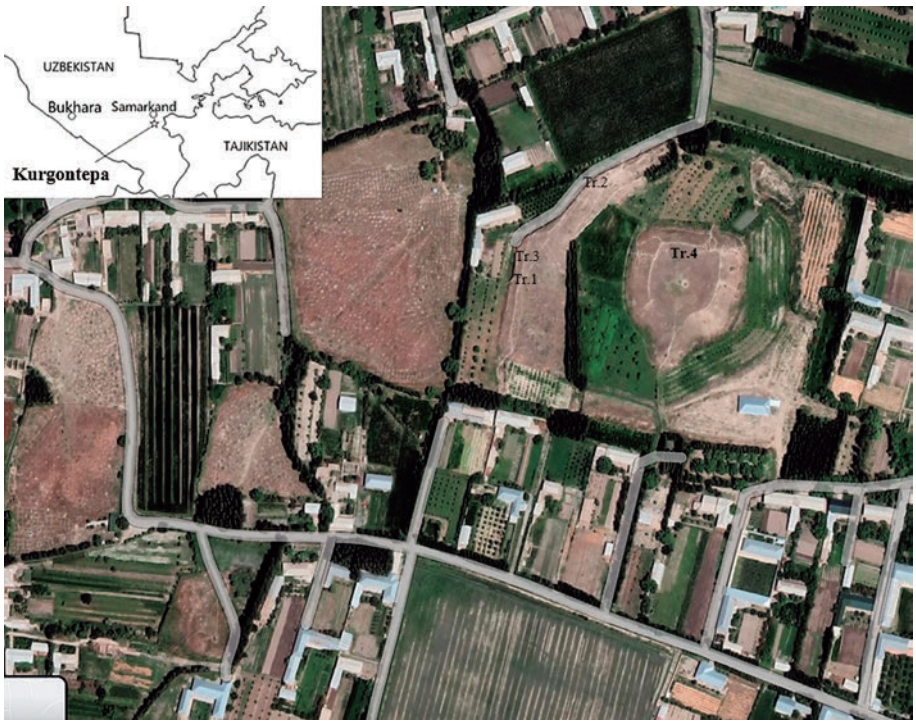

図 1　クルゴン・テパ遺跡の位置

意味することから、クルゴン・テパ遺跡の最も重要な建物であるシタデルが寺院として利用されていたか、あるいはクルゴン・テパ遺跡の範囲内に寺院が存在していたのではないかと考えられてきたが、これまで発掘調査が行われたことはなく、遺跡の性格について詳しいことは分かっていなかった。

報告者らは 2022 年からシタデルを囲むシャフリスタンの 2 地点で発掘を行い、イスラーム以前の 7〜8 世紀と、イスラーム以降の 11〜12 世紀に、当該遺跡の利用が顕著になることを明らかにした（村上ほか 2023・2024、Sandiboev 他 2023）。

昨年度の調査では、シタデルの最奥（北側中央部）に約 11.75×10 m のトレンチ 4 を設けて発掘を行った。その結果、東西方向に幅約 2.1〜2.2 m の壁とその北に通路と推定される部分が確認された。この壁はレンガのサイズから中世初期のものであると推定された。壁の内面は強い熱を受けていたが、わらを含む漆喰で補修されており、カラハン朝期（11〜12 世紀頃）に再利用されたことが判明した（村上ほか 2024）。本年度はこのトレンチ 4 をさらに掘り下げると共に、2022 年度にシャフリスタンのトレンチ 2 において確認された 6 つの部屋の内の一つ、room 3 の発掘をさらに進めた。

3. トレンチ 4

昨年度の調査ではカラハン朝時代の建設段階に属する床面に達した。本年度はこの床を取り外しさらに掘り下げたところ、中世初期のレンガ片を含む層と、その下からイスラーム以前の建設段階に属する床面を検出した。全体像を明らかにするためトレンチの範囲を広げたところ、直径約 8.4×5 m の独立した部屋であることが確認された。部屋の北側中央には、漆喰で装飾された長方形の祭壇状遺構（直径 2.6 m、高さ 0.75 m、幅 0.95 m）が設置されていた。両側には一段低い段が付属しているが、東側の段は奥に倒れた状態であり、8 世紀初頭頃の火災時に何らかの強い衝撃を受けた可能性が高い。部屋には 4 つの柱穴（54〜65×59〜65 cm）が確認でき、その内側にはさらに 4 つのやや小型の柱穴が設置されていた。これらは祭壇を囲む天蓋を支える柱であったと推定している（**図 2**）。

祭壇室の壁は、主に高さ約 3 m のパフサ（粘土ブロック）を積み上げて築かれていた。部屋の出入り口はおそらく 5 か所存在していたとみられる。東西に隣接する部屋につながる入り口と、中庭へ通じる 3 つの入口である。中庭に面した 3 つの入口はすべて壁画で覆われていた（**図 3**）。出入口の残存高は 1.77〜2.6 m、幅は 1.12〜1.22 m であった。室内には 5 か所に壁龕（ニッチ）が設置されており、壁画の痕跡や彫像の脚部が残存していた（**図 4**）。部屋の北壁周辺では壁画の断片が多く出土しており、北東隅では人物像が描かれた壁画が確認された（**図 5**）。現在これらの壁画は壁から

図 2　トレンチ 4 完掘状況

図 3　**トレンチ 4**　中庭に繋がる出入口に描かれた壁画

図 4　**トレンチ 4**　壁龕（ニッチ）彫像の脚部

図 5　**トレンチ 4**　北東隅出土の人物壁画

取り外され、サマルカンド考古学研究所保存研究室において保存修復が行われている。壁画の性格や顔料・技法などについて今後さらに詳細な調査を進めていく。

4. トレンチ 2

シタデルを囲むように築かれたシャフリスタンのうち、シタデルから見て北側において 2022 年度にトレンチ 2 を設け、6 つの部屋が確認された。その内の room3 は直径約 3.1×2.25 m であり、東壁沿いには幅 84 cm、高さ 21 cm のスファ（ベンチ）が設置されていることが判明した（村上ほか 2023）。部屋は未完掘であったことから、今年度の調査ではさらに掘り進め構造を明らかにした。屋根は日干しレンガを平積みしてアーチ状に構築しており、高さは約 4 m に達していた可能性が示唆された（**図 6**）。このような部屋は東側のシャフリスタンでも確認されており、同様の部屋がシタデルを取り囲むように全体に、あるいは大部分に設置されていたものと考えられる。現時点では出土遺物が限られているため、これらの部屋の具体的な用途については明確に断定できないものの、寺院に付随する施設として、礼拝関連の個室や宿泊、その他の重要な機能を担っていた可能性が考えられた。

図6　トレンチ2　room 3

5. 出土遺物

出土遺物の大部分は壁画断片であり、この他2点の銀貨が出土した。壁画断片については、その全体像を明らかにするためにはクリーニングと修復を待たねばならないが、現時点で模様の一部が確認できる比較的大きな断片について報告する。

北東隅で発見された保存状態の比較的良好な壁画には、人物像が大きく描かれていた(**図5**)。人物は長方形のタペストリーの玉座に腰掛けており、玉座はおそらく何らかの動物像によって支えられていると推測される。この人物像は、サーサーン朝の王、特にホスロー1世や2世の頃の表現に類似した装束をまとい、弓とサーサーン風の剣を持っている。また、両翼と三日月を組み合わせた王冠を戴いている。これらの特徴から、この壁画が描かれた時期は6世紀頃と考えられる。人物像の腕部分が不鮮明であるが、腕が四本である場合は神像である可能性を高い。これらの壁画の図像には不鮮明な個所が多くあるが、今後、科学的調査と保存修復作業を行うことで明らかしていきたい。中庭に面した出入口にも保存状態が比較的良い壁画が見られるが、こちらは幾何学と植物模様をテーマとしている(**図3**)。また壁龕(ニッチ)には壁画や彫像の痕跡が見られ、東壁には粘土製の脚部が残存していた(**図4**)。

2点の銀貨はトレンチ4の祭壇付近の柱穴底部から出土した。表には人頭、裏には射手が表現されており、「サマルカンドの射手」として知られるヘレニズム期の名残を示す貨幣として、4−5世紀頃に製作されたものと推定される(**図7**)。サマルカンドにおける他地域の通貨の導入は、紀元前329年のアレクサンドロス

図7　アンティオコス貨幣を模倣した「射手」の銀貨

大王の征服後に始まり、ヘレニズム時代を経てセレウコス朝の銀貨、特にアンティオコスの貨幣を模造したことが知られる。裏側に弓を持つ射手の図像を模倣した貨幣は、価値、技術、金属の質が低下しながらも6世紀頃まで鋳造され続けた。今回の貨幣もこれに類似しており、5−6世紀のものである可能性も否定できない。当該寺院の建設時期がさらに遡る可能性もある。

6. おわりに

本年度のクルゴン・テパ遺跡調査では、シタデルのトレンチ4が祭壇や壁画、彫像を伴う宗教的空間であったこと、8世紀初頭にイスラーム勢力の攻撃により焼失し破壊されたことなどが明らかとなった。このような特殊な空間はアフガニスタン北部のディルベルジンの寺院を想起させるものであり、当該遺跡が中世アラビア語資料に登場する「サンジャルファグン」寺院跡である可能性を強く示唆するものと考える。

本年度のクルゴン・テパ遺跡発掘調査では、イスラーム以前の中央アジア美術や信仰、建築などの特徴を知る上で極めて重要な成果が得られた。今後、さらなる発掘調査と壁画の保存修復・科学的調査などを進めることで、より鮮明にソグド社会を復元していきたい。地元住民や政府機関の注目を集める大きな発見であったことから、遺跡保護への動きがみられる点も大きな成果であった。

本発掘調査は、JSPS科研費 23K00928、JP23K25400を受けて実施した。

■参考文献

・村上智見、ベグマトフ・アリシェル、サンディボエフ・アリシェル、フジャモフ・サナット、マハマディエフ・ガイラット、アルジエフ・コミルジョン、宇野隆夫、寺村裕史、末森薫、押鐘浩之「ソグディアナの都市を探る―ウズベキスタン共和国ク

ルゴン・テパ遺跡発掘調査(2023年度)―」『第31回西アジア遺跡調査報告会要旨集―令和5年度考古学が語る古代オリエント』pp.150–154
・村上智見、ベグマトフ・アリシェル、サンディボエフ・アリシェル、フジャモフ・サナット、マハマディエフ・ガイラット、アルジエフ・コミルジョン、宇野隆夫、寺村裕史「ソグディアナの都市を探る―ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2022年度)―」『第30回西アジア発掘調査報告会 報告集―令和4年度考古学が語る古代オリエント』pp.94–97
・Sandiboev A., Murakami T., Begmatov A., Khojamov S.H., Arziev K., Makhamadiev G., Alimov N., Azzamov G. 2023. 2022-yilda Qo'rg'ontepa yodgorligida olib borilgan arxeologik tadqiqotlar, O'zbekistonda Arxeologik Tadqiqotlar 15, 244–248.